

して云ふ『隨園固以才勝、而亦非未始無法者、蓋其提頓呼應、離合斷續之間、頗有條理、病在貪多務得、細大不捐、好引僻書、喜用奇字』と、蓋子才の子才たる所以、洵に此の病あるに在るなり、試に見よ堯峰望溪等の如き短才微力の徒をして此の病あらしめむと欲するも悪んぞ能くこれあることを得んや、隨園の文甚、尊ふに足らずと雖も、又以て甚、毀るべからざるなり。

隨園の後に建寧の人、朱仕琇字は斐臚と云ふ者あり、梅崖と號す、亦一時の作家なり、又惲敬字は子居と云ふ者あり、自ら云ふ吾文は司馬子長より出づ、子長以下は北面するなしと、齋藤拙堂嘗て子居の大雲山房集を讀みて勺庭の流亞と爲し、評して云ふ『其文得力於先秦、佗黃節白華、平弱爲文者而比之、何啻嫫母之於毛嬙』と、文章は公器、其の愛不愛は自ら人人に存すれとも、之を稱して直に叔子の流亞と爲すに至りては、竊かに疑ふ其の好む所に阿りしか、抑、又叔子を經視せしかを、俱に吾人の與せざる所なり、子居は嘉慶二十二年に年六十一にて卒せし人なり。

嘉慶以後には包世臣、張自珍、曾國藩等あり、國藩の名は髮賊の亂に因りて高く、其文名は甚揚らざるも、條理暢達の文、亦以て誦するに足れり、近時張劍、張之洞、俞樾、吳汝綸、王紫銓諸人あり、共に亦作手と稱すべし、但、紫銓の普法戰記の如きは頗る華麗の筆に屬すれとも、稍、小説家の境域に侵入せり、之を要するに近時の文運、猶未だ全く寂寥ならざるも、之を康乾の際に比すれば亦衰季たるを免れず、今姑らく筆を此に擲き、下に重なる作家の文例數篇を録す。

敬啓密之故人座下、頃自甌閩而歸之已還、即欲奔走一啜、猶以爲未果乃止、雖雲堯過何三大德、具爲述密之還里月日甚詳、今已爲僧、止於高坐寺、僅乃大喜、故人相見之有期、密之雖還而得其所也、在在是也、陳子定生私以問僕曰、密之還何也、曰密之無兄無弟、老父六十餘在堂、雖有二子皆幼、未必任侍養、密之之還宜也、不然密之讀書有道人也、南山之南、北山之北、豈患無溝壑足于此身、而必戀々故土哉、今密之既還、而止於高坐寺、固無異於南山之南、北山之北也、密之之事畢矣、敬賀敬賀、僕與密之交遊之情、愚離之緒、每一觸及、輒數日營營於懷、及至命筆、則益茫然無從可道、猶憶庚辰、密之從長安寄僕麻絲之衣、僕常服之、其後相失無處得密之音問、乃遂朝夕服之無數、指賦所積、色黯而絲駁、亦未嘗稍解而澀澀之、以爲非吾密之之故也、乙酉丙戌後與今時不合、始不敢服、而漸而置諸上坐、飲食腹息、恒對之秋歎、病亟以告僕曰、是衣也、子之所愛、吾爲子稍一裁剪、而更之、以就時製、即可服矣、僕急止曰、衣可更也、是衣也、密之所愛、不可更也、吾他日幸而得見吾密之、將出其完好如初者、以相示焉、蓋僕之所以珍重故人者如此、密之或他日念僕而以僧服相過、僕有方外室三楹、中種蘭蘭粵竹、上懸鄭思骨極無根梅一軸、至今大有生氣、井所藏陶元亮入宋以後詩稿、當共評讀之、(侯方域與方密之書)

曾國藩自萬里歸、已酉正月會飲於三闕樓、盤風千尺倒上吹牆屋、洵々有聲、兩露雜下、庭間盡出其所爲古文、使余論定、庭間之文、句格法且變、而若辨勃率、矯悍尤多秦氣、予與庭間爲童子時同學、庭間天資甚魯、終日讀不盡十行、長省尊大夫於京師、最數過吳門、與吳中名士遊、其文斐然一變、而庭間之名、盛於東南、近二十年、則出入西北塞外、嘗獨身携美人騎馬行萬餘里、最好秦中風土、至以寧夏爲家、而庭間名在西北、其文又一變、庭間歸、乃見予於山中、毛衣革履、雖佩劍帶刀、面目色黃黧、鬚眉蒼涼、儼然邊塞外人、而視向者與予啾啾筆硯間、及細服綬帶、爲三吳名士時、若隔世人物、嗚呼庭間之文、多秦氣何足與也、文章視人好尚、與風土所漸被、古之能文者、多遊歷山川名都大邑、以補風土之不足、而變化其天資、司馬遷龍門人、從游江南流湘彭蠡之匯、故其文奇恣濤洑、得南戒江海烟霞草木之氣爲多也、余讀史嘗怪耕運氏初無功德、而興之暴、四夏強且久、與宋室爲終始、此必有所以自強固者、不爾恃甲兵之力、間披輿圖按其處、距長城外河四數十里、自分力劣弱、終身不能至詳考其興亡盛衰之跡、而庭間乃竟以是爲家、邊徼風土、人情服服治亂、必有深知其故者、他日著之文章、當不止如史傳所紀載也、(魏麟符庭間文集序)

予既寓居太傅忠齋先生之第、其第踰堂而左、得東廂三楹、卑濕幽暗、遇雨將圯、於是稍葺治其一、闢屬南向設几榻、爲燕休之所、暇即坐臥其中、自非理文書接賓客事不他徙、遂名之曰容安軒、容安云者、蓋出於陶靖節辭、而蘇文忠取之以入志林者也、古之達人、其飢而欲食、寒而欲衣、倦而無立錫之地、而欲得居處、未嘗稍異乎人也、惟其中有自得、雖復加之以死生利害、是非得喪、猶不足累其心、遊其一咽、而況起居日用之區々者乎、是故豐饜之食、亦可以飽、絺葛之衣、亦可以暖、衡門圭竇之室、亦可以居、豈有他哉、誠能安之而已、抑予思之、才夫靖節之靈官也、種種采菊、悠然自得、不事爲窮餓所驅、往々賦詩乞食、而未嘗有幾微悔恨之意、文忠之在海上也、變遷瘴氣、極士大夫所不堪、而能刈桂以醺酒、儲蓄芋以爲糧、摘蕒蔬菜以爲羹、日與妻子雲老符秀才之徒、幅巾杖屨、徜徉山市、若志遠隔之無懼者、蓋其安之也如此、夫然後知死生得喪、果不足以動達人之心、而爲之累也、今予左官司城、逾一年所矣、出處無狀之際、雖與靖節異道、及其退居此軒也、有圖書以怡目、有酒茗以適口、從容俯仰、以親文忠以逕有司、不得已而無息就鄰之下者、相距豈不遠哉、此予所以自安、而願附二君子之後者也、(汪琬容安軒記)

晉祠者唐叔虞之祠也、在太原縣西南八里、其曰汾東王、曰與安王者、歷代之封號也、祠南向、其四崇山巖巖、山下有聖母廟東向、水從堂下出、經祠前、又西南有泉、曰離老、合流分注于溝澗之下、溉田千頃、山海經所云、懸圃之山、晉水出焉、是也、水下流會于汾、地卑于祠數丈、時云彼汾沮洳是也、聖母廟不知所自始、土人遇歲旱有禱輒應、故廟特巍奕、而唐叔虞反若居其偏者、隋將王威高君雅因禱雨晉祠、以圖高祖是也、廟前有靈胎祠、子產所云汾神是也、祠之東、有唐太宗晉祠之銘、又東五十步、有宋太平興國碑、環祠古木數本、皆千年物、彫造元謂水側有涼堂、結飛梁于水上、左右雜樹交蔭、希見曠景是也、自智伯決此水以灌晉陽、而宋太祖太宗卒用其法定北漢、蓋汾水勢與太原平、而晉水高出汾水之上、決汾之水不足以拔城、惟合二水而後城可灌也、歲在丙午二月、予游天龍之山、道經祠下息焉、道逢石橋之上、草香泉冽、灌木森沈、條魚翠游、鳴鳥不已、故鄉山水之勝、若或晴之蓋予之爲客久矣、自雲中歷太原七百里而遊、黃沙從風、眼眩不辨川谷、桑乾滹池、亂水如沸湯、無浮橋舟楫可渡、馬行深澗、左右不相顧、雁門勾注披陁陁隘、向之所謂山水之勝者、適足以增其憂愁憤懣、悲憤無聊之思已焉、既至祠下、乃始欣然樂其樂也、由唐叔虞迄今三千年、而靈胎者金天氏之裔、歷歲更遷、蓋山川清淑之境、匪直游人過而樂之、雖神靈窟宅、亦馮依焉、而不去、豈非理有固然者與、爲之祀不獨志來游之歲月、且以爲後之游者告也、(朱彝尊游晉祠記)

江水既合彭蠡、過九江而下、折而少北、益洩行滄汗、而其四百餘里合滄、以傳淮陰、地皆平原曠野、與江淮極異、無有瓊嶼幽遠之奇觀、獨吾郡滄海司空、龍眠浮渡、各以其勝名於三楚、而浮渡漢江倚原、登陟者無險峻之阻、而幽深奧曲、覽之不窮、是以四

方來而往遊者、視他山爲尤衆、然吾聞天下山水、其形勢、皆以發天地之秘、其性情闡闢、常隱然與人心相通、必有放志形骸之外、冥合於萬物者、乃能得其意焉、今以浮渡之近入、而天下往遊者之衆、則未知且暮而歷者、凡皆能得其意、而相過於肩隨問耶、抑令其意抑幽隱樸樸土石之間、寂歷空澗更數千百年、直寄焉以有待、而後發耶、余嘗疑焉、以質之仲郭、仲郭曰昔聞將往遊焉、他日當與君俱、余曰諾、及今年春、仲郭爲人所招遊而往、不及余、迨其歸、出詩一編、余取觀之、則凡山之奇勢異態、水石巖瀾、煙雲林谷之相變滅、悉見於其詩、使余恍恍若有遇也、蓋仲郭所云得山水之意者非耶、昔余嘗與仲郭以事同舟、中夜乘流、出瀟湘下北江過越楚、積虛浮素、雲水澹澹、中流有微風擊於波上、其聲琅々、碾礫薄湧、大魚皆奔然而躍、諸客皆歡呼、舉酒更醉、余乃慨然曰、他日從容無事、當攜纜出遊、北渡河東上大山、觀乎滄海之外、循壘上而四望恒山太行大岳諸華、而臨終南以弔漢唐之故墟、然後登岷峨、攬四極、浮江而下、出三峽、濟乎洞庭、觀乎塵寰、徂東海而歸、吾志畢矣、客有戲余者曰、君居里中、一出戶祇有雞色、倘安盡天下之奇乎、余笑而不應、今浮渡距余家、不百里、而余未嘗一往、誠有如客所譏者、嗟乎、設余一旦而獲攬宇宙之大、快平生之志、以問執事者之口、會仲郭吾誰共此哉、(姚鼐左仲郭渡詩序)

第三章 清朝の詩家

清初明末の詩に錢謙益あるは、猶ほ元末明初の際に楊鐵崖ありしか如く、一代の後勁とも成り又一代之先聲とも爲れるものなり、然れとも謙益の操行に缺くるある固より鐵崖の大節高志に及はず、故に清人の謙益を見る、往々に其の人を悪んで竟に其詩に及ぶものあり、其の人は云ふに足らずと雖も、人を以て言を廢するは亦君子の事にあらざるなり。

謙益は字を受之と云ひ、牧齋と號す、江南常熟の人なり、明の時に禮部尙書と爲り、清師江南を定むるに及びて出降る、禮部侍郎を以て秘書院學士の事を管し、尋て歸を乞ひ、里居十六年にして康

熙三年に年八十三にて卒せり、其詩、少陵を宗とし、韓白蘇陸元虞諸家に入し、尤も才力の富健なるを見る、只晩節の保たざる、聲色其志を溺らし、利祿其情を縈はして、身後の醜名を貽とせり、乾隆の朝に詔して其集を燬棄せしめられたるも、今猶ほ其集を存せり、七絶一首を録す、

池外楊花待暮潮、兩溪桃葉限紅橋、夕陽灑翠春如水、丁字流前是六朝、(留題秦淮丁字水閣)

謙益と同時に吳偉業あり、字を駿公と云ひ、梅村と號す、江南大倉の人なり、亦明人なり、國亡の時に嘗り已に林下に退閑す、侯朝宗之に書を與へて出處を論し、必らず新朝に出つること勿らしめんとせしが、後に當事逼迫、竟に志を行ふ能はず、踣地跼天、終身忘れず以て自ら恨と爲せり、牧齋に比すれば耻を知るものと云ふべし、其の懷古兼弔侯朝宗、

河洛風塵萬里昏、百年心事向夷門、氣傾市俠收奇用、能助宮娥報舊恩、多見羅衣稱上客、幾人刎頸送王孫、死生總負侯朝宗、欲銷繁淚滿襟、(自注、朝宗歸魏人、始書約終隱不出、余爲世所逼、有負夙諾、故及之)

梅村豈一身兩姓の慚を思はさらんや、當事逼迫、人をして節義を枉けしめ、從て之を貶す、士の此際に生れし者尤も悲むべきなり、梅村胸中の感、寧ろ甚憫むべきものあり、『浮生所欠止一死、塵世無絲識九還、我本淮王舊鷄犬、不隨仙去落人間』と吟せしか如き、亦以て其の苦衷を見るに足る、

趙翼、其詩を評して云ふ『梅村詩、有不可及者二、一則神韻悉本唐人、不落宋以後腔調、而指事類

情、又宛轉如意、非如學唐者之徒襲其貌也、一則庀材多用正史不取小說家故實、選聲作色、又華豔動人、非如食古者之物、而不化也、……宗派既正、詞藻又豐、不得不推爲近代中之大家、若論其氣稍衰頹、不如青邱之健舉、語多疵累、不如青邱之清雋、而感憤時事、俯仰身世、纏綿悽惋、情餘於文、則較青邱覺意味深厚也』と、蓋推して青邱以來の作者と爲すものなり、而して其の詞藻の婉麗なるに至りては、自ら後人の好みて玩賞傲習する所なりとす、永和宮詞、臨江參軍、圓々曲、其他古箚律詩誦せるへからざるもの甚多し、

楊州明月杜陵花、夾道香塵迎歲華、舊宅江都飛燕井、新侯關內武安家、雅步纖腰初召入、細合金釵定情日、豐容盛鬋固無雙、歐陽華復第一、上林花鳥寫生綃、禁本傾王點素毫、楊柳風微春試馬、梧桐露冷夜吹簫、君王宵旰無歡思、宮門夜半傳封事、玉几金床少晏眠、陳姬衛嬖誰頻待、貴妃明慧獨承恩、宜笑宜悲愁玉翠、儲備不皇徵索問、娥眉欲蹙又溫存、本朝家法修清議、房帷久絕珍奇薦、勅使惟追陽羨茶、內人數減昭陽曉、維揚服製擅江南、小閣爐煙洗水含、私買瓊花新機錦、自修水滸進黃柑、中宮曾得君王意、銀燭不妬溫成貴、早日銀釵離大家、比來歡笑同良婦、奉使龍樓買佩蘭、往還偶失兩宮歡、雖云樊姬能辭令、欲得昭儀喜惡離、綠綺小字書成印、瓊函自署充華進、晴暉長教聖主憐、含辭欲得君王溫、君王內顧恤傾城、故劍還存敵國恩、手贈玉人翠詩問、自來階下拭啼痕、外家官拜金吾尉、平生遊俠多輕利、總客因催博進錢、當筵便殺彈琴伎、班姬才詞左姬賢、霍氏驕奢實氏事、涕泣微聞椒殿前、笑靨豪華瀟灑田、有司奏削將軍傳、貴人冷落宮車夢、永巷傳聞去玩花、景和門裏誰陪從、天顏不憚侍人愁、后促黃門召共遊、初勸官家伴不應、玉車早到殿西頭、兩王最少乘衣戲、長者賈書少弟弟、問道翠臣舉定陶、周將多病憐如意、豈有神君詔帳中、漢云王母降離宮、巫陽莫教介舒恨、金釵彫殘玉筋紅、從此君王慘不樂、遊豔匿酒風蕭索、已報河南失數州、况經小子傷零落、貴妃遺恨坐匡牀、儲君啼血掩洞房、昔年楊柳水荒涼、嘉艾旌旄玉魚流、病不換秋淚沾臍、瘦骨自經君王膝、昔沒長門有夢魂、花飛寒食應相憶、玉匣珠襦啓便房、魂歌無異非同具、君王欲割哀城賦、誰能同臣有謝莊、頭自宮娥唯願感、庸知朝露非爲

福、宮草明年戰血腥、當時莫向西陵哭、窮泉相見痛介黃、避而官家問水王、幸免玉運逢喪亂、不須銅雀總與亡、自古豪華如轉眼、武安若在愛家族、愛子雖添北清愁、外家已葬驪山足、夜雨椒房陰火青、杜鵑啼血泣龍門、漢家伏后知同恨、止少當年一貴人、碧殿樓涼新木拱、行人尙識昭儀塚、夢飯冬宵問茂陵、斜陽蔓草埋殘苑、昭邱松楸北風哀、南內春深掩夜來、莫奏霓裳天寶曲、景陽宮井落秋槐、(永和宮詞)

本篇は田貴妃薨逝の事を咏せしものにして、皆古史を援引して微意を遣り、以て其の本旨を顯はすに在り、田妃に子あり、慈煥と云ふ、寵に因りて特に鍾愛せらる、故に趙王如意を以て喩と爲すか如き即ち是なり、梅村身興亡を閱し、時事忌諱多く、其の題を命するにも敢て顯かに言はず、殆んと捉摸する所なきか如きものあり、雒陽行、松山哀、臨江參軍等の如き、其他亦多く明に題意を言はず、却て讀者をして自ら之を得せしめんとせり、其意、亦最も苦めりと云ふへし、下に掲ぐる七絶は梅村の岳忠武を以て左良玉に比擬せしもの、蓋蘇胤生なる者は良玉の客なりしか故に士大夫猶往々に之を矜寵せり、梅村の贈亦此れか爲めなり、良玉の事は侯方域の壯悔堂集中に詳なり、就て參看すべし、

四典哀曲夜深聞、絕似南朝汪水雲、回看岳侯墮下路、亂山何處葬將軍、(口占贈蘇胤生)

梅村に繼きては南施北宋を對雄と爲す、北宋とは宋琬を云ひ、南施とは施閏章を稱するなり、宋琬字は玉叔、荔裳と號す、山東萊陽の人にして順治四年の進士なり、官は浙江按察使に至る、性孝友

吳三桂反して成都を陥れし時、妻子皆蜀に在りて己獨り京に在りしかば、憂憤して卒せりと云ふ、施閏章字は尙白、愚山と號す、江南宣城の人にして順治六年の進士なり、翰林院侍講に官す、性忠愛、朋友の義に篤く、操履孤遠、口吃りて語艱めり、宋琬と名を齊ふして南施北宋の目あり、二人亦古文を能くせしむ其詩に及はず、詩は其盛名を致せしものなり。

兩家の詩、宋は雄健磊落を以て勝ち、施は溫柔敦厚を以て勝てり、南人北人氣質の剛柔異同、亦此間に於て參看するを得べきなり、王漁洋の門人嘗て詩法を愚山に問ふ、愚山云ふ『子師言詩如華嚴樓閣、彈指即現、又如五城十二樓、縹渺俱在天際、余則譬作室者、飯壁木石、一一俱就平地築起』と、門人云ふ此れ禪宗頓漸の義なりと、論者以て確論と爲せり、是の時に當り興朝の詩運初めて盛觀を呈し、陳維崧、尤侗、朱彝尊、顧炎武、王士禎、查慎行、趙執信、厲鶚等諸人前後に嗣出し、更に下りて乾隆の際に至りては袁枚、蔣士銓、王文治、張問陶、趙翼、吳錫麒等ありて菁華を發揚せり、而して當代の文運詩運、共に齊しく康熙乾隆に發露し盡して、以後復た雄厚沈鬱なる作者を見ること能はず、文學の盛衰、亦世運の汚隆と相伴へば、偉大なる作者を嘉慶以後に求むべからざるもの、蓋亦偶然にあらざるなり。

陳維崧は字を其年と云ひ、迦陵と號す、江南宜興の人にして、翰林院檢討に官せり、姜宸英が序せ

る湖海樓詩は即ち維崧の集なり、尤洞は字を展成と云ひ、西堂と號す、長洲の人にして官は翰林院侍講に至れり、西堂少歳の時は専ら才情を倚ひ、歸田以後は白樂天に倣ひ寧ろ太易に流れたり、其詩は寧ろ長を古體に見る、贈李研齋太史の作の如き、逸氣貫穿、殆んど太白の遺意あり、他は得桐城方爾止先生書感賦懷密之先生の如き、寄黃泰州先生求爲先人誌墓の如き、最も集中の雄篇に屬す。

王士禛 は字を貽上と云ひ、阮亭又は漁洋と號す、山東新城の人にして官は刑部尙書に至り、康熙五十八年に年七十八を以て卒せり、詩を以て海内に鳴ると五十餘年、一代の大宗たり、乾隆中に特旨を以て文簡と諡す。

漁洋早歲、錢牧齋に重せられ、後學殖日に富み聲望日に高く、宇內尊ひて詩壇の山斗と爲せり、趙秋谷談龍錄を作りて士禛の詩を証謀せしも、思ふに未だ以て士禛の心を服するに足らざるなり、其の詩神韻を以て宗と爲す、嘗て唐賢三昧集を編して其の意を示せり、沈歸愚其の詩を撰して高華渾厚、法度神韻あるものを取れり、蓋施愚山の所謂華嚴樓閣は即ち此に在るなり、

朝氣江東久寢宴、永安宮殿草蕭々、邪將家國無窮恨、分付滄陽上下潮 (蝶磯羅澤夫人詞)

蘆荻無花秋水長、滄雪微雨似瀟湘、雁聲搖落孤舟遠、何處青山是岳陽 (樊圻詩)

意ふに漁洋の面目、此の間に在るか、漁洋本、神韻を以て宗旨と爲せば、其の長を見はす所自ら絶句に存す、若夫れ終始を鋪陳し聲韻を排比し豪邁切實なるものに至りては往々に細けらる、然れども亦明麗博雅尤も其の細祭の工を見るもの亦少しとなさす、故明景帝陵懷古、諸葛墓下作等の如き、必らず亦篇中雄篇の一に洩れざるものなり、當時阮亭と對稱せられし者を朱竹垞と爲す、竹垞海内の重名を負ひ、今に至り猶朱王を以て並稱して敢て軒輊するなし、然れども竹垞は専ら詩を以て傳はるにわらず、且又詩に工なりと雖も之を阮亭に比すれば恐くは次乗たるを免る能はず、趙執信嘗て國初の詩人を論し、亦朱王を以て二大家と爲し、謂ふ王の才は高くして學以て之に副ふに足り、朱の學は博にして才以て之を運ぶに足ると、而して其の失を論するに及びては、云ふ朱は多きを貪りて王は好きを愛すと、蓋亦公論なるに似たり、竹垞の詩は古詩を以て長を見る、格律蒼勁、自ら此公の本色、

玉帶生歌 玉帶生文信國所遺硯也、予見之吳下、既慕其銘而裝池之、且爲之歌曰、

玉帶生、吾昭汝、汝產自端州、波來自橫浦、幸免事降喪、僉名謝道清、亦不識大都、承旨趙孟頫、能令信公喜、昨汝置蔡府、當年文獻寶、代汝一敷、滄軍誰附翠羽、察佐誰郎巾、弟子誰王炎午、獨汝形骸短小、風貌樸古、少不能道、口不能語、既無鵝之鶴之活眼晴、兼少犀紋彪紋好、眉嫵賴有忠信存、波濤孰敢侮、是時丞相氣尚豪、可憐一舟之外無尺土、共汝草草飛書意其苦、四十四字銘厥背、愛汝心堅剛不吐、自從轉輓屢喪師、天之所壞不可支、驚心柴市日、慷慨且誦臨終詩、疾風蓬勃揚沙時、傳有十載士、表以石塔藏公尸、生也亡命何所之、或云四臺上、啼髮一叟涕漣漣、手斲竹如意、生時亦相隨、冬背成陰陵骨朽、百年蹤跡入

莫知、會稽張思廉、蓬生賦長句、抱遺老人關筆符、七容察中敢嘯怒、吾今遇汝滄浪亭、漆匣初開紫衣露、海桑陵谷又經三百秋、以手摩挲尚如故、洗汝池上之寒泉、溧汝林端之翠霧、俾汝長留天地間、思魂靈氣常凌紫、

顧炎武も亦單に詩文を以て傳ふるものにあらざるのみならず、寧ろ詩文を以て傳はるを耻とせる者なれとも、今其の文其の詩に就て品論するも亦決して第二流の人に落ちず、好古の士固に以て此人の徒を尙友すべきなり、其詩調夷齊廟の作の如き、述古諸篇の如き、其他長篇大作、必らず誦すべきもの多きも、姑らく他の作一首を録す、

是日驚秋老、相望各一涯、離懷銷濁酒、愁眼見黃花、天地存肝膽、江山閱盛華、多蒙千里訊、逐客已無家、(酬王處士九日見懷之作)

趙執信字は神符、秋谷と號す、山東益都の人、康熙十八年の進士なり、高才あり左春坊左贊善に官し、讌飲觀劇を以て官を去る、乃ち情を酒に縱にし、酣嬉淋漓、四坐を媿罵し、借りて以て其の抑鬱不平の氣を洩せりと云ふ、其詩、思路鏗刻を以て主と爲し、王阮亭の神韻標榜を以て宗とするに満たず、談龍録を作りて之を貶せしも自作亦人意に満たざるものあり、簡明目録に二家の詩を評して『王之規模闕於趙、而流弊傷於屠廓、趙之才力銳於王、而末派病於纖仄、兩家並存其得失、適足相救也』と云へり、要するに二家各、得失ありと雖も、平心に二家の詩を讀まば、秋谷は本より阮亭の匹にあらざるを知らん。

查慎行は字を悔餘と云ひ、初白と號す、浙江海寧の人、康熙四十二年の進士にして、翰林院編修に官せり、其の詩近體の源は陸に出で、古體の源は蘇賦に出つと稱せらる、趙雲松は初白を評して『才氣開展、工力純熟』と云ひ、以て直に之を唐宗諸家の後に列せんとせり、然れども其の詩の失や頗る蘊藉少し、且つ初白本、書卷少し、故に能く典故を使ふと能はず、又議論を好みて専ら白描を用ゆ、是亦其の甚しきに過ぐるを惜むのみ。

厲鶚字は太鴻、錢塘の人、康熙五十九年の舉人にて著はす所、樊榭山房集あり、學問淹洽詩品清高亦一時の作家と爲す、其の他黃辛田、嚴海珊等の如き、亦康熙末年の詩家に屬す、袁枚は乾隆四年の進士、其詩尤も能く才を以て情を運へり、蔣士銓字は心餘、苕生と號す、乾隆二十二年の進士、忠雅堂集あり、王文治、字は禹卿、夢樓と號す、江蘇丹徒の人なり、時に袁簡齋、詩を以て江浙の間に鳴る、夢樓聲華之と相上下す、又書を善くす、嘗て云ふ吾詩と字と皆禪理なりと、死する時室中に趺坐して逝けりと云ふ、趙翼は字を雲松と云ひ、甌北と號す、其詩、袁簡齋、蔣心餘と名を齊ふす、嘗て詩話を著して青蓮以下の大家を評す、論者以て豪傑甘苦を知るの言と爲す、甌北は江蘇陽湖の人にして八十六にて卒せり。

張問陶 字は仲治、船山と號す、四川遂寧の人、乾隆五十五年の進士なり、狀貌、猿に似たり、

故に又自ら號して蜀山老猿と云ふ、其詩、生氣湧出、沈鬱空靈、諸名家の外に於て又一境を開けり
 寶鷄題壁諸篇の如き、評する者以て老杜諸將の遺を得たりと稱す、其の婦も亦詩を能くす、二百年
 來蜀中の詩人、船山を以て最と爲す、著はす所船山詩草あり、他は吳錫麒(穀人) 吳文溥(濬川)
 陳文述(碧城)等の徒の如き、亦乾隆の末年乃至嘉慶間の詩家と稱するに洩れざる者なり、其他一
 代の作家を指數すれば、百千を以てするも猶ほ悉すに足らざるべく、方外閨閣の詩亦佳なるもの甚
 少しとせず、王韞蘭、朱道珠、倪瑞璿、蔡季玉等の如き意ふに尋常一様の脂粉紅女にあらざるべく
 止嵐、同揆、成鸞、超遠、宗渭、元璟等の徒の如き、或は國變に際して僧と爲る者あり、或は儒を
 棄て禪に入りし者あり、意ふに其中必らず世道人心の際に於て憂佛不平の意なしとせざるべし、故
 に自ら激昂頓挫、短節堅蒼の音、亦乏しとせず、下に趙查張の作を録し、又閨媛及び僧詩各一篇
 を附出す、

灘行日百轉、轉轉山四圍、寒流中屈曲、鬱怒不自持、秋浪蕭殺氣、陸發龍蛇機、迴風地底來、雷雨皆倒飛、亂石勢騰攫、狹惡各
 異姿、似吼非船逆、列陣前相迫、篙師工避就、色授願指揮、努力爭差髮、險途生坦夷、遊子因奔峭、驚定翻耽奇、秋雲遶水壁、
 杉木森下窺、弄波情無極、棹月願猶遲、夕陽駐西嶺、爲我延清輝(趙執信十八灘中)
 寒空月黑烟初寒、照夜俄生萬嶺巖、赤幟千人爭趙壁、火牛百道走燕軍、危時突以絳爲戲、我意方憂玉亦焚、不信劫火吹不盡、草
 間孤覓尙成群、(查慎行夜觀燒山和申丞公韻)
 蜻蛉一葉獨歸舟、寒浸春衣夜水幽、我似橫江西去鶴、月明如夢過黃州(張問陶過黃州)

虛舟飄忽飄蓬萊、此豈乘風被浪來、天若有情猶識我、人如無命不須才、誰憐死後詩千首、莫放生前酒一杯、爾向鸞爐驚臥犬、陶
 然沈醉亂香堆(張問陶佛前飲酒浩然有得)
 河廣誰航我我過、未知安否近如何、暗中時滴思親淚、只恐思兒淚更多、(倪瑞璿憶母)
 誰知地老天荒後、猶得重登黃鶴樓、浮世已隨塵劫換、空江仍入大江流、楚王宮殿銅駝臥、唐代仙眞鐵笛秋、極目蒼茫渺何處、一
 瓢高挂亂雲頭(戒顯登黃鶴樓)

餘論

余は既に信じて本史を述べしも、上下三千年の文學、未だ全く此に盡きたりと謂はず、嘗て此に盡きたりと謂はざるのみならず、編著の體例に於ても、亦必らず繁簡其宜を失ひ、取捨其精を缺きし所甚尠とせざるを知る、今本史を結ぶに臨み、俯仰回首、聊一二の補遺を爲さざるべからず。

余の見る所を以てすれば、既に本史序論に於て其端を發せしが如く、支那文學に於ける一種の特色は、全く其文字の上に在りて、上は聖經賢傳より下は史子百家の書に至るまで、各其の道を載するに、一として此文字に頼らざるはなく、文字ありて聖賢諸子百家の道、始めて明なるを得れば、許氏の謂ひしか如く文字は即ち『經藝之本』にして本立て道生すと云ふべし、且其の創作せられたるは、黃帝時代に在るが故に、支那文學の起源を考ふるに於て、直に此時代に溯るを得べし、然れども當時に於ける字數は未だ甚多らずして、重もに形象指事に係りしが故に、春秋以前に在りては、單に之を文と名けて字と云はず、其の文字と併稱するに至りしは、秦の琅邪臺刻石に於て始めて之を見たり、後世に至り史籀の大篆と區別せんが爲め之を古文と稱せり、蓋字とは華乳の義にして、譬へは人禽の子を生みて、漸く其種類を増加するが如く、創始の形象指事よりして、聲と形と相合

して形聲と爲り、形と形と相合して會意と爲り、遂に數多の文字を造成するに至りしを謂ふなり、按するに衛恒の四體書勢に『昔在黃帝創制造物、有沮誦倉頡者、始作書契以代結繩』と、倉頡、沮誦は皆黃帝の史臣なりしに、許氏の説文を初めとして、諸書に沮誦の名を言ふもの少きは、畢竟省略に従ひしものなるべし、然れば創始の文字、決して倉頡一人の手より出でたるにあらず、隨つて後世増加の文字も亦必らず一人一時の作にあらず、幾多無名の人の手にて、各其必要に應じて形成せられたるもの、適、集めて大成せし人の名に由りて、後世に傳ふるに至りしを見るべし。

周代に及び文字の教、漸く興りて六書の學あり、宣王の時に大史籀は大篆十五篇を著せしが、創始の古文と或は異なるものありき、意ふに史籀の大篆は創始の古文を訂正して、其の足らざるを補ひしものにて、其中には無論古文の面目、若しくは其遺意を存せしならんも、復た倉頡時代のものと同ならずしを見るべし、然れば春秋以前通行の文字は、此大篆にして、孔子の六經を書し左丘明の春秋を述べしも、皆此大篆を以てせしとは、漢初に發見せられし壁中の經、及び張蒼が獻せし所の左氏傳に於て之を知る、七國、雄を争ふに及びて、天下、文を同ふせず、秦、天下を併せて後、李斯、趙高、胡毋敬等、又史籀の大篆を省改して、各、作爲する所あり、所謂小篆即ち是にして、以て史籀の大篆と區別するなり、是の時に當り、秦皇、四海を混一して、大に成役を興せし際なり

ければ、随つて官獄も亦多事にして、急速に篆字を作るに便ならざりしより、又小篆を省約して、隸人に佐書せしめしかば、遂に隸書あるに至れり、而して古文大篆等は、是より絶えて、小篆と隸書のみ並ひ行はれ、隸書は實用的文字と爲り、小篆は重もに謹嚴なる刻石等に用ゐられたり、泰山嶧山等の刻石の如き、即ち是なり、漢代に至りて又八分書あり、傳云ふ蔡邕の作る所なりと、蓋亦隸體を解散して平易に就きしものなり、魏晉六朝の際に及びて、分隸又變して正楷と爲り、爾來書法益々遞變して、遂に今時通行の楷行草諸體を形成し、殆んど復た古意の尋ね見るべきものなきに至れり、而して之れが關鍵たるものは正さに魏晉の際に在り、以て古今の一大巨溝を劃せしを見るなり。

之を要するに支那の文字は、本形を以て主と爲して聲を主とせず、而して其義自ら備らざるなし故に其發展の迹を觀るに、象形、指事先つ興りて、而して後に諧聲、假借等あるに及べり、蓋形を主とするものは目を用ゐて、聲を主とするもの、耳を貴ぶは、固より當然にして、支那に於ける造字の基礎、前者に在りとするれば、假令ハ諧聲、假借等の如き、聲に依るものなしとせざるも、先づ目を用て其形を見て而る後に其義を得るを要とせり、然らば支那文學の基礎は、全く其文字の上に在りと謂ふも、亦不可なかるべし、余故に曰く支那文學に於ける文字の排列、即ち所謂詩歌文章は

自ら是一種の繪畫の排列聯合せられたるものに外ならざるなりと。

支那造字の説、此の如し、故に古學は字を識るに始り、之を小學と謂ひいて、學に入るの第一門とせり、周の盛時に當り、天下文を同ふして、四方に通行せられしものは、上段に記せし所の大家にして、孔子の六經を書し、左丘明の春秋を述べしも、皆此を用ゐたり、春秋傳に稱する楚の左史倚相が讀みし三墳五典八索九邱等の書も、亦必らず此大家に由りて書かれたるなるべし、秦漢の際に至り、字體遞變して復た返らず、之に加ふるに焚書坑儒の厄あり、漢代に及びて壁中の古書を得たるも、已に當時に在りて能く讀む者あらず、辛ふして之を當時通行の文字に翻譯せしを見れば、古篆の久しく世に通用せられざりしを知るべし、是より遺老宿儒、復た漸く首を擡げて、殘經を撮集し、斷簡を保存するに力めたりと雖、各見聞する所を以て是を爲し、誤識強解、亦參出して、古學の眞意を距ると漸く遠く、遺篇を搜羅し、殘簡を收輯するの極、僞書贗本、亦随つて出づるあり其甚しきに至りては、貨物を以て蘭臺の秘書を改定するものあるに及べり、而して天下後世、其濁流に浴して、古學本來の面目を見る能はず、滄海橫流して、學術古今の關を爲せしもの、實に此際

又支那文學に於て最も見るべきは、儒教主義の發展せられたるとなり、先秦以前の文學、即ち余か本史に於て謂ひし所の諸子時代に在りては、儒墨名法諸家、各其道を以て道として旗幟を文壇に樹てしも、漢以後に至りては、殆んど儒學一統の天下と爲りて、復た他の異主義の並立するを容さず、前には儒墨名法、互ひに異端として相排闢せしもの、今は却て狹隘なる儒教の範圍内に在りて黨派の流別を爲して相争ふの奇觀を現出せり、且つ儒教主義の理想たるや、本、治國平天下を極致とするが故に、黨派流別の争は、自ら政權の授受と密接の關係を有するに至れり、故に漢季黨錮の慘を始めとして、宋には蜀洛、元祐の黨争あり、明には東林閹豎の禍あり、皆儒教の範圍に於ける講學の異同よりして、門戸の見を持ち、以て黨を聚め朋を分ちて相排撃し、遂に禍を宗社に及ぼすに至れり、是其の最大なるものにして、他は歷代幾多の講學家、互ひに標榜して門戸を張り、以て相下らざるもの、特に一二を以て指數すべからず、蓋亦末流、名を好み勝を争ふの弊、終に此に至りしものなるべく、豈儒學の本意ならんや。

蓋聞く古の儒者、身を立て己を行ふや、法を先王に誦して、經に通し用に適するを務とせりと、故に其操守、謹嚴にして、人格亦自ら高潔なりき、後世に及び、俗儒陋儒腐儒の徒、相接して出て、

復た儒の古の六藝の餘に出ると知らず、揚雄の博聞強識を以てして、其人格に於ては大に惜むべき所なしとせず、況んや其他に於てをや、或は儒を以て利名を釣るの具とせし者あり、衣食の爲めに儒を業とせし者あり、其名を儒にして其行を盜竊に比せし者あり、操守、節なく其志を二三にして猶儒と稱せられし者あり、然れども此種の徒輩に在りても、其稱述せし所は、極めて光明正大にして、眞儒の口吻に似るもの少しとせず、試みに漢魏六朝諸家を始めとして、唐宋元明、乃至近世諸家の集を把りて一讀せば、即ち其間に於て名理の言に乏しからざるを見るべし、醜りて史上の地位を其列傳に參看せば、諸家悉皆然りと云ふべからざるも、間、其別人にあらざるかの疑を生ぜざるを得ざるものあり、故に古來の格言に『不以人廢言』の句ありて、著者の人格と著作物と相伴はざると、既に久しき以前よりの通例なるに似たり、蓋亦陋儒の眞を亂りしものにて、豈立言を以て三不朽の一に居きし古意、此の如くならんや。

之を要するに、假令ひ其立行は未だ以て君子の儒とするに足らざるも、其眞意は未だ必らずしも悉く儒教主義に出でざるにもせよ、又未だ必らずしも眞に治國平天下の理想を有せざるにもせよ、其の所謂儒者文人詩家等を總稱する文學者の手に成る文章詩賦の多くは、均しく儒教主義に由りて支持せらるゝ所の意思の發展せるを見る、故に一論文を草し一策問に對ふるにも、必らず經典を援引

するか、若しくは往儒の言を掲げ來りて、其の據る所を確むるが如き、概ね其の常例と稱するに適せり、蓋儒教主義の理想とする所は、治國平天下に在り、治國平天下の極致は堯舜時代を以て理想とするに在るが故に、其文學の溫故的なる保守的性質を帯ひしとは、亦已むを得ざるの結果と云はざるべからず。

此の如く支那文學に於て儒教主義の開展せられたる結果、其文辭に於ては儒雅切實を以て用に適すと爲し、詩賦に於ては溫柔敦厚を以て教旨と爲して、標準を此に取れり、是に於てか戯曲小説等の作に至りては、自ら擧げられて士君子の敢えて指を染むるを憚る有様と爲れり、蓋支那に於ても古來小説の稱なきにあらず、漢志に載する所の虞初周說九百四十三篇を初めとして唐代に於ける諸小説の如き、其の種類少しとせず、然れども今世普通に稱する所の院本小説と其撰を異にして、或は雜事を叙述するあり、或は異聞を記録するあり、又或は瑣語を綴輯するありと雖、多くは物語、隨筆、若しくは神話の類にして、未だ今世の所謂小説を以て之を自するに適せざるなり、故に上記の物語、隨筆、若しくは神話の種類に屬すべきものは、其由來する所頗る久しく、漢志の注に虞初は武帝の時の方士と稱するを見れば、少くとも秦漢の際に於て其萌芽を發生したりしを知るべし、唐代に及びて其枝葉愈々繁茂し、文人才子、筆墨を以て遊戯を爲すの餘、間、情事を點綴して、人の

流覽を迎え易からしめたるものあり、現今坊間に流行する唐代叢書中に收むる所の一百六十四種の如き、信僞相半すと雖も、亦唐代の作を以て稱せられ、且つ其作者も亦當代に於ける知名の士少しとせず、蓋是其所謂小説家流なるもの、古の稗官に出づるとして、百家九流の一に位置せられたる所以に由るべし、而して今世普通に稱せらるる院本、小説、傳奇、戯曲の類は、宋元以來の發達に係れり、梁紹壬の兩般秋雨庵隨筆に『小説起于宋仁宗時、太平已久、國家間暇、日進一奇怪之事以娛之、名曰小説』と言ふもの、之を得たりと爲す、故に世の小説、傳奇、雜劇と言ふもの、必らず先づ宋元を稱せり。

思ふに白話小説の宋代に起りし原因の内には、或は紹壬の言の如きものあらんも、其の發達に至りては、必らず元代に於てせしならん、試みに元代傳奇の歴史として稱せらるる西廂記の董解元に由りて創作せられて、王實甫に由りて廣改せられたるが如きの類を見れば、如何に其發達の迹に於て、換骨脱胎の苦心經營を経たるかを推想するに足るべく、又白話小説の一大奇書として其流傳を廣ぶする水滸傳の施耐庵の手に出でしが如き、亦以て當時の氣運が如何に此種の著作上に傾注せられたるかを見るに足るべし、特に唱曲の一道に至りては、誠に元代の當行にして、其の元氣淋漓、直に唐詩宋詞と相頡頏するもの、固より種々の原因より出でたるならむも、其の詞曲を以て士を取りた

りと傳ふるは、應に事實にして、其一因たりしなるべし、然れども選舉志、及び典章に之を見ざるを以て、或は其の然らざるを疑ふものあるも、當代にては僧尼の考試をさへ執行せしとなれば、亦或は別に一門を設けて、特に梨園の供奉に備へたるなるべし、又元人の未だ中原を統一せざりし以前に在りては、朔漠の野に天幕穹廡の生活を爲せしが、俄かに入りて中原の文物彩華の域に安宅せしより、其性情志氣の上にも大なる變化を來たせしに相違なく、昔日勤儉の反動は、即ち驕奢淫靡の俗に移りて、麗情婉語の世界を現出し、遂に其耳目の娛樂を満すべき必要上よりして唱曲の發達を促せしものならん、而して風流才華の士、綺語を以て相高ぶり、復た意を儒教主義の所謂儒雅切實、溫柔敦厚の旨に致すに暇あらず、以て其淋漓傾瀉を極めて、元代戯曲の名をして殆んど空前絶後たらしめしものに似たり。

降りて近世に至りても作者猶絶えず、明人の傳奇に於ては高則誠の琵琶記、湯顯祖の牡丹亭の如き頗る人口に膾炙する所なれども、未だ以て元人の壘を廢するに堪えず、清人の白話小説に於ては、何人も紅樓夢を推して第一位に置くを憚らざるべし、傳奇に於ては、孔云亭の桃花扇、岐、觀るべきものなるも、之を元人に比すれば、猶影響を摸するものたるに過ぎざるなり、之を要するに、小説傳奇の作は士君子の敢えて指を染むるを欲せざる所にして、間、之を籍りて其才情妙緒を洩らす

ものなしとせざるも、亦多くは其氏名を顯すを欲せず、其の此れを以て性命と爲す者に至りては、多くは其人格陋劣にして性情亦下品なり、故に士君子の流に在りては、假令其中心に於ては、未だ必らずしも傳奇小説の作を藐視せるにもせよ、悍然として自ら進んで唱亂晦婬と稱せらるゝ此種の著作に筆を試むるもの少きは、蓋亦當然の結果たらざるべからず、試に李贄、金聖嘆以下諸人の立行性格を見れば、思更に其半に過るものあらむ、余故に曰く、士君子亦小説傳奇の作に意なきにあらざるも、敢えて之を爲さざるは、性行卑劣の徒と筆墨を執りて、短長を類波濁流の間に争ふを恥とすればなりと、然れば由來此種の著作の殆んど文學以外に擯斥せられたる如き觀を作すもの、豈亦偶然ならんや。

明治三十年五月廿六日印刷
 明治三十年五月三十一日發行
 明治三十五年十二月十五日訂正再版印刷
 明治三十五年十二月十八日發行



著者
 發行者
 代表者
 發行者
 代表者
 印刷者
 印刷所

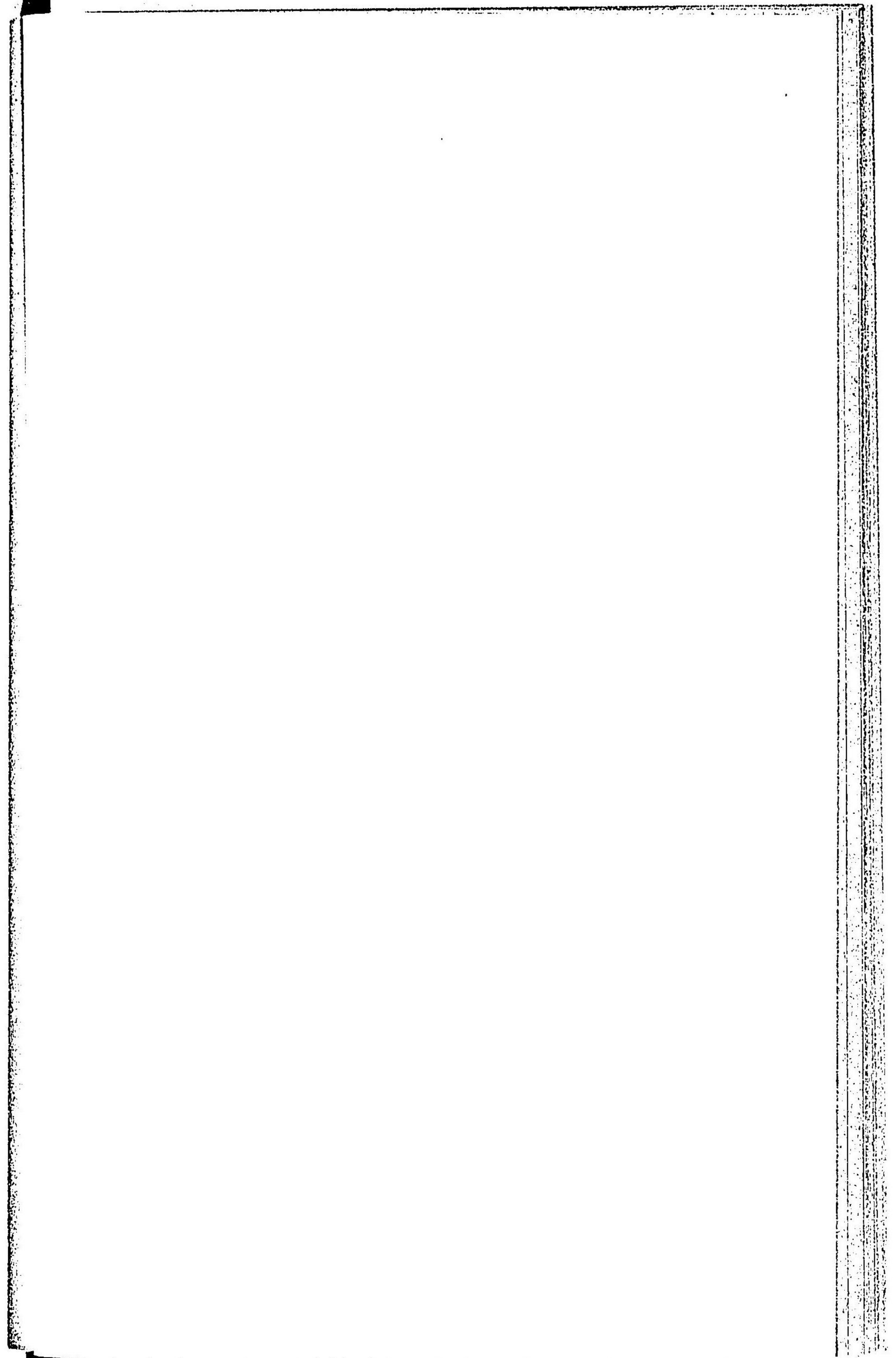
發兌元
 全全

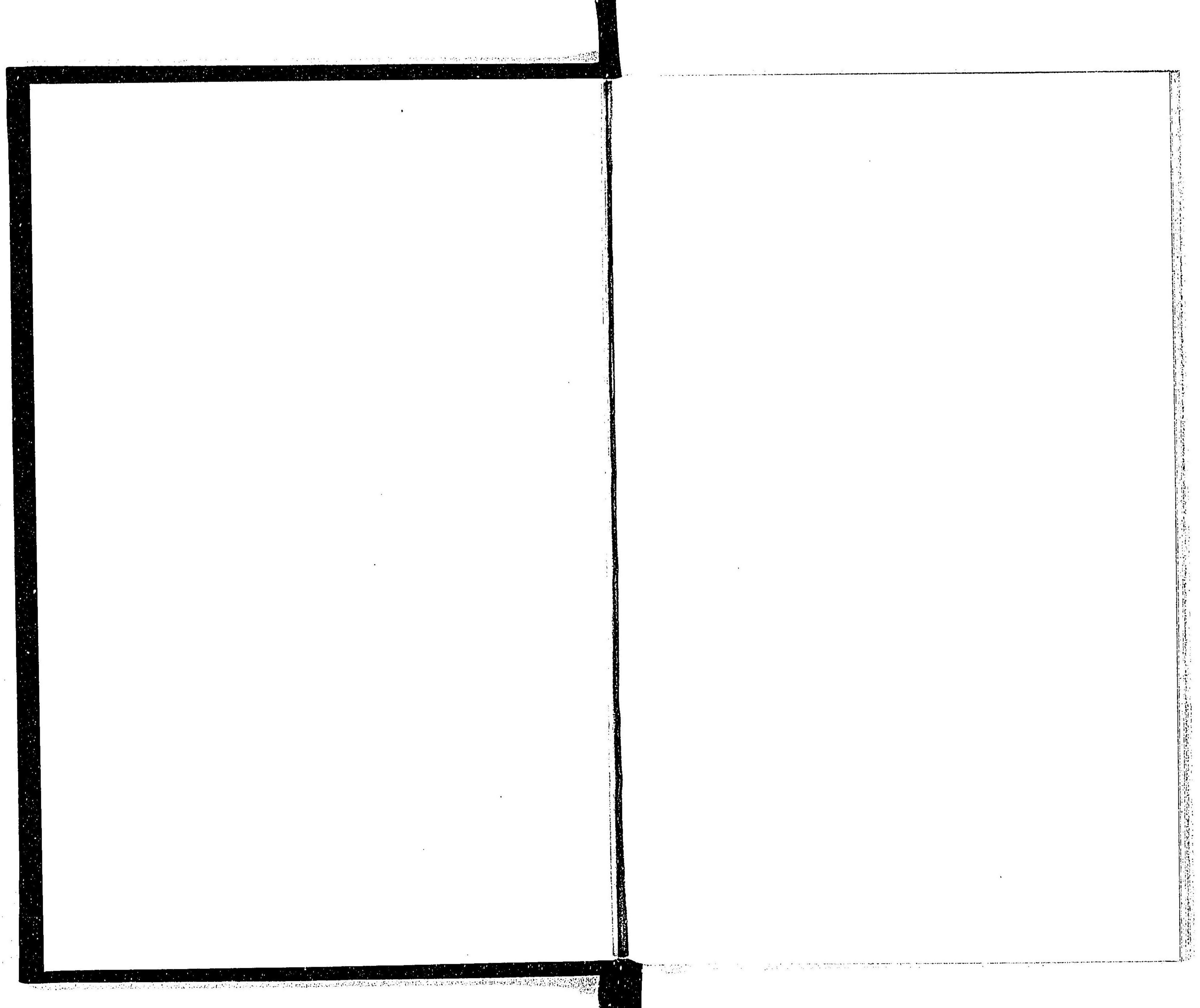
大賣捌
 富山房
 育英舍

支那文學史 附

定價金壹圓八拾錢

古城貞吉
 東京市神田區真神保町九番地
 富山房
 合資會社富山房社長
 坂本嘉次馬
 東京市日本橋區本石町十軒店六番地
 育英舍
 育英會主
 坂上七
 東京市京橋區西紺屋町二十六七番地
 佐久間衡治
 東京市京橋區西紺屋町二十六七番地
 株式會社
 秀英舍
 勸學會
 合資會社
 富山會房
 英山房
 樂善堂
 育英舍
 經濟雜誌社







920.2

K073/a

(t)

084739-000-2

920.2-K0731s(t)

支那文学史

古城 貞吉/著

M35

DBA-0069



